
バカとリンと召喚獣

風影 黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとリンと召喚獣

【Nコード】

N0900Z

【作者名】

風影 黒

【あらすじ】

試験召喚獣システムが使われた試験校、文月学園。そんな中、Fクラスに所属することになった黒井小鈴。幼なじみの吉井明久と共に勉学とオカルトと恋(?)に忙しい学園生活をどう突き進む!?

プロローグ（前書き）

処女作となります。

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

プロローグ

文月学園に入学して二度目の春がやってきた。

校舎へ続く坂道を歩く人影がチラホラ見えてきた中、普通の人らしくない集団に囲まれている人影があった。

肩の辺りがボサボサに切られている赤い胴着を着ている武道家。下駄にリーゼント、学ランと昔のマンガから出て来た様な不良（口には葉っぱ）。剣道着を着てる者。薙刀を構える女性や覆面に鎌をもつて愛を叫んでいる者（？）。どう見ても普通じゃない空間が文月の登校路で起こっていた。

だが、周囲にいる登校途中の生徒達は誰も目を向けない。気にもかけずに坂を登っていく。

それもそのはず。なにせ、普通じゃないこの空間がここで起こるのはよく（・・・）ある事だから。

そして、集団に動きがあった。

「……今日こそ、今日こそ勝たせてもらうぞ、『黒子』!!」

「いざ」

「…尋常に」

「…………勝負!!!!」…………一人、二人、果てには全員が雄叫びの後、中心目掛け走り出す。その表情には決死さえも見えるようだった。

さて、中心にされてしまった人物はと言うと。焦った様子も見せていない。手に持っていたカバンを足元に落とし、指で眼鏡にかかる銀髪を払いながら、接近してくる人々を見ている。

そして…

「……ニヤハ！」

鈴の音と共に姿が消えた。

「西さん、二一八才」

玄関前で生徒達に封筒を配っている先生の中でも目立つ、浅黒い肌で短髪、去年の担任である先生に挨拶をする。

「二一八才は朝の挨拶じゃないぞ。それに、西村先生と呼ばんか、黒井！」

西村宗一郎。別称、鉄人。生活指導の鬼と呼ばれているが、去年から親友や悪友のおかげで学園で一番親しくなった先生だろう。

「そうでした。すみません、西さん」

それでも変えないから溜息混じりでこちらを見る。半ば去年から変わらないうり取りで根負けしているのだろう。

「それとだ、黒井」

西さんが視線をずらして今登ってきた坂道に目を向ける。

「あれはまたお前か？」

「ん、でも誰にも触れてませんよ？」

視線の先には先程の人々が倒れて山積みになっていた。

「……まあいい。ほら、お前のだ」

そう言う箱の中から一枚の封筒を手渡す。

「ありがとうございます。……中身はわかりますが」

「そうだな。しかし、お前のやった事は人として誇れる事だ」

「……それでは失礼します」

頭を下げ、脇を通り抜けていこうとするが足を止め、再び話し掛ける

「西さん。カンなんですが今年もお世話になります」

「……ということはあいつらともか、ヤレヤレ」

お前のカンはよく当たるしなと深い溜息をつく西さんに苦笑しながら今度こそ下駄箱へと向かう。

「……誇れる事、ね」

取り出したペーパーナイフで封筒を開き、中にあった紙を引っ張り出す。

『黒井小鈴…… Fクラス』

「オレはそんなんじゃないよ」
こうして最低クラス生活が幕を開けた。

プロローグ（後書き）

お目通し、ありがとうございました。
良い作品を作れるよう、訂正、感想、アドバイスなどをしていただけたら嬉しいです。

プロフィール（前書き）

プロフィールです。

少しオリ主を特殊にしてみました。

プロフィール

プロフィール

黒井小鈴（くろい こすず）

銀髪ショート 眼鏡 猫（虎？） 明久に忠臣？

身長、明久より10？ぐらい低い

体型 細型だが鍛えているから女子（！！）としては少し重い

特技、暗算、嘘発見、手品

苦手、嘘をつくこと、怖い話

性格、明久を中心に回ってる？ 多人格

一人称ー二人称ー三人称、オレーお前ーあいつ

明久に恩があるので明久に尽くしたいとすら考えてる。

恋。無双の華雄さんに眼鏡をかけ、胸なしな感じ。目つきがきついのもあってあまり女子らしく見られず、楽だからと男子の制服を着用。

明久の上の階に一人ぐらし。明久と家族で知り合い。

プロフィール（後書き）

お目通しありがとうございました。

ということで、オリ主は男娘と書いて（オトメ）と言っのを目指してみます。

アドバイス、訂正、感想は大歓迎です

一話目（二学年・試召戦争、開始）（前書き）

更新です。

鈴がFクラスの面々とどういった感じなのかをだしましたが…予想より長くなりました。

簡潔にまとめる他の作者さん達を尊敬します。

…こちらも長くなってしまいました。

楽しんでいただけたら幸いです。

一話目（二学年・試召戦争、開始）

「……大戦時代か、ここは？」

真つ直ぐ旧校舎に向かい、Fクラスらしき教室の前にやって来たのだが……

「ちゃぶ台（脚折れ少々）、座布団（中身スカスカ）、窓は割れて何故か×印にテープ……ここだけ『欲シガリマセン、勝ツマデハ』の時代に來たか？」

おまけに天井にはクモの巣、教室に敷き詰められた古い畳はかび臭い上、キノコが生え、壁にひびと落書きで埋め尽くされている。正直、廃校の方がましじゃないか？

「ん？そこに居るのは鈴か？」

呆れて教室を眺めていたら一人の生徒がこちらを見て手を振っていた。

目を向ければ去年のクラスメート、女子が羨むスラっとした身体。女性が嫉妬しそうな優しい微笑み。男性を虜にしそうな癒し空間を漂わす木下秀吉（♂）がいた。

「ん？主、妙な事を考えなかったか？」

「んにゃ。去年と同じくだなんて思っただけさ。しばらくぶり、ヨシヒデ」

「ワシは秀吉じゃ」

「羽柴の？」

「木下じゃ」

「徳川は？」

「秀忠じゃな」

『イエーイ』

「あんたらまたやってるの？」

軽い掛け合いをしていると一人が呆れたようにしながら声をかけてきた。

見てみれば友人がいた。

「おはよう、スズ」

「おはよう、ミナ。ミナもやっぱりFだったか」

スラッとしたモデル体型。ポニーテール。帰国子女の友人、島田美波。挨拶を返すがニッコリ笑ったかと思っただけこちらの腕を掴み…

…、

「やっぱりって何！？ウチがバカだっていいの！！？」

「朝から巩固めはきつい、キブキブ」

「のわりには余裕ありじゃな」

関節技をかけられた。若干余裕はあるがきついものはきつい。

「ミナ、江戸幕府が開かれたのは何年？」

「…」

「ベンゼンの化学式は？」

「…」

「さて、言うことは？」

「すみませんでした」

未だに漢字がイマイチらしいがこういったのもあるからFクラス入りなのだ。まあ、そんなことを言えば暴走して、関節技が骨折技に変化するから言わない。

「それと、早く解かないとムツチーが覗いてるぞ？」

「えっ？キヤアアアア！！」

「……覗いてない」

「鼻血で畳が赤いぞい」

いつの間にいたのか小柄、気配なし、カメラ小僧。土屋康太ことムツチーがいた。

「全く、相変わらず。むつつりスケベめ」

「…おれはスケベじゃない」

「何色だ？」

「白」

「コラアアアア！！！！！！！！」

怒声と共に身を伏せれば頭上を美波の右足が通る。髪を二、三本持つていき、その威力を感じさせる。

「あ、あんたらー！！こんな場所であんてことを言うのー！！？」

「誰も誰の、何がとは言つてないが？」

「…誘導尋問は卑怯」

「誘導と尋問、まとめて辞書で調べてこい」

「おーい、そこ。悪いが騒ぎはそこまでにしてくれ」

じゃれあいがあるところになってきた所で声がかけられた。見てみれば教壇に赤髪、長身の奴がこちらを見ていた。

「…なんだ雄ツーか」

「待て、ツーってなんだ？俺はロボットじゃないぞ？」

「んじゃU2」

「変わってないぞ！？雄がUに変わってたぐらいだぞ！？余計ロボットぽくなったぞ！？」

「えっ！？違うっけ、戦闘用・アンドロイド、サカモト・U2。モデル、悪鬼羅刹」

「それっぽく付けるな！？ってか1がいるのか！？別モデルがあるのか！？」

「っでなんで教壇に立ってんだ？」

「話をいきなり戻すなー！！…ああ先生が遅れているらしいから、代表としてまとめようと思つてな」

こいつが代表であるのを驚くと同時に以外な行動に感心した。

野生児、狂暴、外道。去年からの悪友、坂本雄二。それがFクラスとは言え、代表として行動するのが意外に思……

「それに俺の兵隊になる奴らの顔を見ておきたかったからな」
訂正、やっぱりこいつはこいつだ。

「それはそうと、あのバカはまだ来てないのか？」

「…来てないけど、あまりバカバカ言うな」

「事実だろ？」

「……なら、誰かさんが黒髪、長髪の撫子美人さんと仲が良いって事実を言い触らしても事実だからいいよな？」

「なっ！？待て！！お前、何処でそれを！？」

「さて、このクラスから始めるか」

「待て！！」

「皆知ってる？こいつ、あのきり「すいません、ちよつと遅れちゃいましたっ」」まさんと……って」

出鼻をおもいつきり碎いてくれた人物は、ネジが一本抜けたような表情。ちよつと中性的な顔。イジられやすい雰囲気。そして、学園内、唯一の肩書を持つもの、吉井明久がいた（遅刻）。

「……リンに雄二、何やってんの？」

「……ハッ、早く座れ、このウジ虫野るウオオオオオオ！！؟؟？」
スダタタタタツツ！！

明久を罵倒しようとした雄二だが飛来物によって中断され、膝をがに股に開け、両手を股間に持つてきた奇妙なポーズで固まっていた。雄二の皮と制服すれすれの所に鈍い光を放つ大量の苦無と手裏剣が刺さっていた。そしてそれを行った犯人は……

「っテメー、何しやがる！！？」

「……スマン、条件反射だ」

オレである。

一話目（二学年・試召戦争、開始）（後書き）

個人的に、猫は気まぐれで掴み所がないとおもってます。
アドバイス、感想などいただけたら嬉しいです。

プロフィール + α (前書き)

オリ主が想像しにくいので追加します。

プロフィール + α

小鈴の容姿、召喚獣について

容姿、恋。無双の華雄に文月学園の制服（男子）を着用。外見からの見た目は胸なしにしてください。

眼鏡着用。

首に鈴付きチェッカーを付けます。

手袋を付けています。

手袋着用などの理由や秘密は作品中で少しずつ出していきます。

召喚獣

華雄です。ただし、武器は戦斧と鉄扇を片手ずつに持っています。能力はCクラス上位くらい。

得意科目：数学、170～200

苦手科目：国語、80～110

他は130～160ぐらい

クラス基準

Fクラス：900未満

Eクラス：900～1200

Dクラス：1200～1500

Cクラス：1500～1800

Bクラス：1800～2000

Aクラス：2000～

（Aクラス上位3000以上）

科目数：10（国語、古文、数学、化学、生物、物理、保険体育、

英語リスニング、英語W)と考えると
他にも何か変更、追加ができればコチラに追加します。

プロフィール + α (後書き)

質問などがありましたら回答をこちらに追加します。

二話目（前書き）

なんか、伏線だの謎だので時間がかかってしまいました。
お気に入り登録してください。方々がいらっしやいました。ありが
とうございます。
それでは、楽しんでいただけたら幸いです。

二話目

<バカテスト、化学>

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。

黒井小鈴の答え

『問題点……マグネシウムだと炎色反応を起こすから危険』

合金の例……ステンレス鋼』

教師のコメント

正解です。ステンレス鋼は錆に強く、包丁にも使われるそうです。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

合金の例……酸化鉄』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。さらに、錆だらけの鍋で料理するつもりですか。

吉井明久の答え

『問題点……花火みたいに火花がでて、家が火事になる
合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

問題点は一応正解ですが、確か花火にマグネシウムを利用しません。後、すごく強いと言われても。

「それにしても……流石はFクラスだね」

「半ば病気になる。もしくは、バカは病気になるって言わんばかりだな」

「テメーら、ほのぼの会話してんじゃねえー!!」

教室を眺めながら互いに溜息をつきあっていると後ろから怒声をぶつけてくる輩がいた。

「あれ？雄二、いつまでビートたけしのギャグやってるの？」

「そういえば明久知ってるか？ビートってのはてんさいという野菜のことで、天才たけしって意味合いを持っているんだそうだ」

「へえ」

「だからほのぼのしてるな!!それと好きでやってんじゃねえ!!
鈴、いきなり何しやがる!!!」

「…仏の顔は三度までという諺がある」

「ん？ああ……」

「オレの顔は明久までだ」

「どんな限界だ!？」

「えーと、ちよつと通してもらえますかね？」

不意に明久の陰から覇気のない声がした。

覗き込めば弱々しい風貌をしたオジサンが入口で立ち往生していた。ようやく担任が来たみたいだ。

「それと席についてもらえますか？ホームルームを始めるので。後、教室であまり暴れないように、色々と壊れやすいですから」

「はい、わかりました」

「すみません」

「さつさと外せ!！」

耳元でぎゃんぎゃん騒ぎ立てるのを無視したい所だが先生に迷惑がかかるので助け出しておいた。

そして、他のクラスと比べて遅いホームルームがやっと始まった。

「えー、大変お待たせしました。おはようございます。二年F組担当となりました……………」

「先生、どうぞ」

「ありがとうございます。黒井さん」

「イエ、初回特典の名刺代わりです」

黒板に名前を書こうとしていたが、まともなチョークすら用意されてなかったたので商品の(・・・)チョークを先生に手渡し、席に戻った。

「改めまして、担当の福原です。よろしく願います。さて、Fクラスの設備について確認します。皆さん全員にちゃぶ台と座布団は支給されますか？不備があれば申し出て下さい」

環境が不備だらけだと思うのだが…。

「センサー、おれの座布団に綿が入ってません」

「我慢してください」

「センサー、ちゃぶ台の脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センサー、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

+ 対応も不備だらけか。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

「！！先生、必要と思った物を自分で調達していいんですか？」

「？ええ、Ｆクラスはそういう事になっています」

「わかりました。ありがとうございます」

聞き逃せない言葉を再確認して、携帯でしっかり言質を保存しておく。これで色々とできるだろうが……時間があればクラス設備設定と校則の隙間の再確認とかも調べておこう。

『リン？何する気？』

思案を巡らしていると前にいた明久が振り返って、こっそり耳打ちをしてくる。

『此処じゃあつという間に病気になる。色々持ってきてマシな状態にするついでに、活用させてもらおうと計画中』

ピンチをチャンスに。短所を長所に改造するのが師匠の教えだからな。使えるものは親や熊でも使おう。……熊はともかく、あの人はオレでは無理だな。

『そろそろ静かにしておけ。先生に目をつけられるぞ？』

『あ、うん』

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

先生の指名により、生徒の一人が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

独特な口調の秀吉が最初だった。しかし、男ばかりのこの教室で秀吉の周りだけ空気が澄んでいる気がするんだが。

「……と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑んで自己紹介を終えるが、三分の二ぐらいの男子が顔を赤くしているか？…明久が念仏を唱えているみたいだが何があったんだ？

「……………土屋康太」

後ろを気にしていたら次の生徒、ムッチーが立ち上がったかと思っ
たら、名前だけ告げてすぐに座った。そんなに目立ちたくないか？
そつえば、返さないとならない物があつたが後でいいか？

「……です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦
手です」

鞆に押し込んでおいた物を見ていたら次の人。

ユラユラと揺れるポニーテールは……

「趣味は吉井明久を殴ることです」

それじゃDSの人だぞ、ミナ。笑顔で明久に手を振っているが正直、
天敵指定されても仕方ないんじゃないか？

しかし、冷静に周囲に視線を見渡してみれば、けっこう顔見知り以
上が多いが……偶然ということにしておこう。

淡々と自分の名前を告げるだけの自己紹介が進んでいき、明久に回
ってきた。

「……コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って
呼んでくださいね」

『ダアアーリーーン!!!!!!』

野太い声の波動にやられて今にも明久が崩れ落ちそうだ。正直、余
波だけでも不快な気分になる。ダーリンって鬼娘とおにごっこやつ
て、電撃喰らいながらもナンパを続けた奴になるつもりか？

「……失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」

ダメージが深いのだろう。明久の口調が若干おかしい。

そして、ようやく順番が回ってきた。

……まあ、目立つのは嫌だから必要なことだけでいいか？

「黒井小鈴です。親友の明久に何かしたら、……楽になれると思わ
ないように」

最後の言葉は少し小さく言うが上手く全体に聞こえてくれたようで、
一時的に教室が沈黙で満たされた。

『……ざわざわ……なあ、あいつの名前、なんか女っぽくないか？』

コソコソと話し始めたので席に戻ろうとしたが……一応、それも対応しとくか？

「後、オレは生物学上、女なのでお間違えなく……」

『……………ハアッ！？』

『おい、あいつ、何言ってるんだ？』

『どこをどう見ても男だよな』

あゝ、知らない奴らが騒ぎ出した。別に自覚してるからいいが悪かったな、女成分皆無で。

「……………あんたでいいや。これが証拠」

『ん？学生証？（黒井小鈴、性別・女性）！！？』

『まぢか、野々村！？』

『…本当だ』

『…ってか、今気づいたけどあいつ、【店】の黒井じゃねえ？』

まずい、終わりが見えなくなってきた。

いかにして終わらせようか悩んでいたら教室の扉が突然開けられた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

息を切らせてやってきた女生徒の姿を見て、教室から驚いた声が上がった。

それもそうだろう。彼女がここにいる訳が無いからだ。事情を知らない面々が騒ぐが……これは助かる。

「姫路さん。今、自己紹介をしている所なんだ。丁度良いから、名前、趣味、好きな食べ物、好きなタイプ、ついでにスリーサイズをどうぞ」

そう言った瞬間クラス全体の視線が彼女に集まった。

「えっ！？は、はい！あの、姫路瑞希と言います。趣味は料理をすること。好きな食べ物は苺のショートケーキ。好きなタイプは、その、優しく元気な人が……。スリーサイズはきゅって言えません！」

真っ赤な顔を両手で隠そうとしているが、耳まで赤くなっているた

め丸分かりである。クラスが異常なハイテンションになっているのは興奮状態になっていくからだろう。（端の方でミナがうな垂れているのは最後の言葉に絶望しているのだろう）

『はい。質問です！』

「え？あ、はい。なんですか？」

いきなりの質問に驚く姫路の反応が小動物を思わせてさらにテンションが上がって行く。

『なんでここにいますか？』

……もう、存在を忘れられているので静かに席に座る。

失礼な質問に聞こえるが彼女がここにいる理由を知らない者には疑問であるため、仕方が無いことだろう。

成績は常に上位一桁の成績を収め続けている彼女は、その整った容姿と共に誰もが知っているからだ。

『姫路さん、かわいそうだね』

明久がボソリとつぶやくように言う。

文月学園の振り分け試験は途中退席は全ての教科を0点にされる。

彼女は試験中に高熱を出してしまい、退席をしてしまった。

……正確に言えばオレが保健室に連れて行ったのだが……。

『姫路さん、この教室で身体大丈夫かな？』

明久の心配通り、身体の弱い彼女には埃に隙間風、その他もろもろは悪化の原因だろう

周囲がバカ合戦をしている中、彼女のことを心配するこいつは……相変わらずと言うべきか？

『多少、明日からマシにするように手は打つが環境そのものを入れ替えないときついな』

『…環境そのものを入れ替える、ね……』

「で、ではっ、一年間よろしく願いますっ！」

逃げるように自己紹介を打ち切り、空いていた明久と雄二の間に腰を降ろした。

「き、緊張しましたあ……」

安堵の息とともにちゃぶ台に突っ伏す彼女に明久が声をかけようとしていた。

「あのさ、姫――」

「姫路」

しかし、反対側の雄二の声にかき消されて彼女は向こうを向いてしまった。

けど、明久。スポットライトを浴びて絶望に喘ぐ様な事をするな。後であいつの解体作業は手伝ってやるから。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それはボクも気になる」

体調の話になり、さすがに気にしていたのか回り込んでまで話に参加していった。

「よ、吉井君！？」

そんな明久に驚いた表情と赤く染まって頬。ああ、また堕としたのか？

「姫路。明久がブサイクですまん」

「ユウ。お前が言うセリフじゃないし、フォローじゃなく罵倒だぞ、それ」

「そうです！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」

やはり堕ちていたか。

「そう言われると、確かにみてくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？それは誰……」

「そ、それって誰ですかっ！？」

明久を遮るように雄二に迫る姫路。遠くではミナも耳を傾けている。しかし、その行動の意は明久には届かない。届いたら色々楽になるんだが……。

「確か、久保……利光だったかな」

性別、[♂]だな。

「……もう僕、お嬢にいけない」

あー、明久が声を殺して涙河を作ってしまったている。ってか婿入りする気だったのか？

「明久、雄二の情報は嘘だ。根本に間違いがあるからな」

「根本？」

「考えてみる？久保って確か学年、現次席だ。そんな頭の良い奴が

……」

雄二を指指して、

「こんなゴリラと知人である訳がないだろう」

「それもそうだね」

「誰がゴリラだ、コラ！！！！」

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

先生が教卓を叩いて警告された。

「あ、すいませー」

バキッ バラバラバラ……

教卓が崩れて木片になってしまった。腐ってたのか？

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください」

足早に先生が教室を出て行く。改めて、現状に溜息が出てくる。

すると、明久が雄二を誘って廊下へと出ていった。一体何を始める気だ？

聞き耳だけでも立てに行こうと思ったが……

「あのー、ちょっと良いですか？」

姫路に呼び止められた。

「何？」

「その、あ、ありがとうございました。保健室まで運んでくださって……」

「……その話か？別にいい、成り行き上だったただけだ」

「で、でも。そのせいであなたまで無得点扱いにされてしまいましたし……」

「点数なんてどうでもいい。それに明久と同じクラスになれた方がよかったから」

去年が去年だけに知らない所で死にかけられたら困るし……。

「吉井君と親しいんですか？」

首を傾げながらそんな質問をしてきた。

「……あいつとは小学からの付き合いだし、な」

「小学校、ですか？」

何やら考え込む表情になる姫路だが、――もしかして……

「ねえ？誰だかわからない？もしかして……」

「えっ！？いや、あの、その……ごめんなさい、分かりません」
「やっぱりか。そんなに変わったかな？」

「ん、小学校の頃転校してきて、なんて言えばいいだろう。……

ドラ猫ってわかる？」

「ドラ猫ですか？」

「ああ、いい。解ってない反応だから。……となるとノラとか系は知らないだろうし……！ニケは？」

「ニケですか？それなら五年ぐらいの運動会で聞いた事が確か……」

「そうそう、オリジナルシャツ作成の時。オレのコードネーム……」

「でもそれは黒井さんだったと………黒井さん、ですか？」

「そうだが？」

「………エエエエツ……！！！！……？」

……叫ばれてしまったが、そこまで変わったかな？

二話目（後書き）

次回、【店】が登場します。しかし、更新は気まぐれなので気長にお待ちください。

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

三話目（前書き）

気がついたらユニークというのが1000を越えていました。ありがとうございます。

……ちょっと暴走しましたが少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

三話目

ああ、今回はそういう事か……。

姫路とのやり取りをやっている内に先生が戻ってきて、いつの間にか明久達も席に座っていた。

明久にこっそり何をしていたか聞いても……

『まあ、すぐわかるよ』としか言わない。

そう言われればどうしようもないし、まだ自己紹介が終わっていないので引き下がった。後はまた淡々と自己紹介をしていき、ようやく終わりが見えてきた……その時、

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

コウが先生に呼ばれ席を立ち、教壇に向かうその姿は去年からよく見るふざけた雰囲気ではなく……、

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

代表らしい貫禄を見せているように見えるが、間違いない。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

奴がクラス全体を見るのは様々なことを計算し始めた顔であり、

「さて、皆に一つ聞きたい」

間を取って、全員を自分に集中させる策略はかつての異名を彷彿させる。

注意が自分に集まったのを感じ取ってから、視線をゆっくり動かして……、

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れたちゃぶ台

と環境の悪さの代表格へと誘導するは、手品師を思わせる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――不満はないか？」

「大ありじゃああつ！――！！」

教室全体に魂の叫びをさせるはどこかの指導者のようで……、

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

次々あがる、自業自得を無視した不満の声

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

そんな同意の声を聞き、ニタリつと笑う表情は、獲物を見つけたケダモノのものが……、

「これは代表としての提案だが――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

何かを見つめる眼は周囲すら巻き込む悪ガキのものであった。

視線、吉井明久

えつと、どうも。吉井明久です。今、僕は先生が教室からいなくなつてから、クラス代表の雄二を誘つて廊下に出てきました。今ならホームルーム中だから人の気配はなく、安心して話をするこ

とができる。

「んで、話って？」

「この教室についてなんだけど……酷いもんだと思わない？」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ。凄かったな。あんな教室見たことがない」

そりやそうだろうね。遅刻しかけて横目で見てきたただけだったけど、あのバカでかい教室の上に、壁を覆い隠すような大きさのプラズマディスプレイ、さらにノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートなどエトセトラ。

え？横目にしては詳しすぎないかって？……まあ、ちょっと、ほんとにちょーっとだけ足を止めて覗いていたけど……。

ともかく！！AとFの格差は計り知れない。月とすっぴんぐらいだ！！（注意、正しくは月とすっぽん、です）

「そこで提案。せつかく二年になったんだし、試召戦争をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ」

雄二が警戒するような目で見てくる。

……なんて言おう。流石に僕やこいつ、多数の男子は自業自得だと思うけど、リンや姫路さん達にはもう少し救いがあるともいい思っただけという理由は恥ずかしいし……、

「……学校って社会の縮図だろう？それなのに、こんな差別を受けるのはおかしいじゃないか！？でも、今の僕達が言ってもやつかみにしか聞こえない。だから、一番上に立って、それから権利の主張を……」

「つまり、姫路や鈴達のためになんとかしてやりたいと」

「人がせつかく考えた言い訳を流すな!!」

「…カマをかけたらすぐに引つ掛かった」

しまった!ハメられた!

警戒を解いたが、代わりにニタニタとこちらを見て笑っていた。

「……ああそうだよ!!リンに言われて思い浮かんだんだ。悪い
か!!?ノノノ」

火が出るほど顔が熱いが、知ったこっちゃない。代表である雄二を
動かさないとこれはできないんだから、もう正直に言ってやるさ。

「まったく、お前は相変わらずのバカだな」

「うるさい!!で、どうなの?Aは無理でもB…はきついからC…

…イヤ、駄目ならD…百歩譲ってEでもいいからやらない?」

「オイオイ、どんどん下がっていつてるぞ?」

だって、あのFクラスでのやり取りを聞いていれば、どれだけバカ
の集まりかわかるっつの。

「安心しろ。どのみち、戦争はやる気だった。しかも、Aクラス相
手にな」

「えっ?なんでさ?」

「……世の中、学力だけが全てじゃないって証明したくてな」

……何をしたいのかはよくわからないけど、何かを思い詰めるよう
な雄二がいた。

「…それに、いい作戦も思いついたしな。先生が戻ってきたな。俺
らも戻るぞ」

「あ、うん」

雄二に言われて教室に戻る。……けど、何だろう。何かいやな力
ンを感じるんだけど。

〈視線、黒井小鈴〉

『バカか？Aクラス相手に勝てるわけねえ！』

『これ以上、酷い設備はごめんだ！』

『姫路さんがいれば、何もいらない！』

教室内が喧々囂々になってしまったが無理もない。

Fの基本戦闘力になるテストの平均は、高く見ても900。対し、

Aの平均は低く見ても2000。と、二、三人で囲んでも返り討ち。

相手によつては五人相手でも返り討ちにできる相手なのだから。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『何をバカなことを』

『一体、なんの根拠があつてそんな事を言つんだ！！』

『姫路さん、大好きです』

明らかに話に関係ない輩がいるが、それは無視しながら不満が出尽くすのを待ち、口を開いた。

「……いいだろう。ならば、根拠を話してやる。おい、康太。姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……！！（ブンブンブン）」

「は、はわー！！」

必至に顔と手を横に振つて、否定の態度を取っているが……頬の畳の跡もだが鼻血を隠せてないし。

「土屋康太。こいつがあ有名なムツリーニだ」

「……！！（ブンブンブン！！）」

『ムツリーニだと……？』

『バカな、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……』

『ああ。ムツリーの名に恥じない姿だ……』

その名自体が恥だろう。

「……？」

姫路はその意味が解つてないみたいだが、わざわざ教えるものでもない。

「姫路のことは説明する必要も無いだろう。皆だってその力は良く知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですか」

「ああ。ウチの主戦力だ期待している」

このクラスどころか、学年でも五指に入る实力は、戦争では無敵の札となるだろう。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けはとらない』

彼女だけ、な。

『ああ。彼女さえいれば何もいらない』

誰か知らないけど、明らかに脈は0だし、前の明久がもう墮として
いる、諦めるのを勧めする。

「木下秀吉だっている」

『おお……！』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

秀吉は学力ではFだが、演劇部のホープとして有名である。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだがやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるのか！』

いや、Aはないだろ。去年、授業すらまともに聞いてすらいなかったし。

…まあ、テンションを潰すから言わないでおくけど。

「さらに、気づいている者もいるだろう。黒井小鈴が何者かに…」
ほぼ暴走を始めてる面々を客観視していたら名を上げられてしまった。

「そう。奴は、なんでも屋・【黒い子、鈴の卓球便】の店主だ！」
「ちよっと待てえ！誰だ、その名前をつけたのは！？」

なんか知らんが変なことに。品物の依頼なんかにすぐ対応（返球）、
って意味で卓球便は名乗っているが頭についてるのはなんだ？しか
も、某クロネコのリズムみたく語呂が良いし。

『やはり、奴がそうなのか』

『鉄人すら脅している黒い子がいると聞いたが……』

『色んな情報も集めて、裏から学園を操っていると俺は聞いたが』

それもさらに待て。西さんはしっかりと事前にチェックを通してあ
るから何も言わないようになったただだし、情報集めは品物の流行
予想と師匠の頼みなただけだ！！

『黒い子、鈴がついているウチが負けると思うか？』

『勝手にオレにそんな役を付けんな！！否定させる！』

しかし、誰も話なんぞ聞いてくれず、暴走が止まらない。

『それに、吉井明久だっている』

……シンー

あつ、止まった。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな
必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いた事ないぞ』

あゝれ？忘れてる？楽になれると思うな、って身体に刻まないと駄
目かな？（黒）

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察
処分者』だ」

ああ、ユウ。遺言はそれでいいのね。

「よくも言っただな、雄二！！皆、チガウんだ。それには深い理由が
……って、リン！？どこからそんなでかい、先が斧みたいな槍を取
り出したの！？」

「ん？明久。これは戦斧って言って、そこのゴリラを開きにするも

のだ」

特殊な収納法で仕舞ってあった相棒を取り出し、ユウ目掛けて振り下ろす体勢になる。

「あ、明久！助ける！！試召戦争が出来なくなるぞ！！」

ああ、その時は代わりの代表を選抜する。だから……永久に寝てな。

「……お休み、ユウー」

「リン、ごめん！！」

別れを言おうと思ったら明久が飛び掛かってくる。しかし、後は振り下ろすだけだから止められや……、（ストンツ）えっ？

「ほーら、リン。落ち着いて」

「ちょ……あき、ひさ……それは……ナシ……」

膝から崩れ落ちるように力が抜け、何も出来なくなる。

明久が何をしてきたかという……頭を撫でてるだけ。何故か知らないが明久に撫でられると力が抜けてしまう。

「……ヒサ……ヤメ……。ユウを……ヤレない……」

「雄二のはいつもの事だからいいよ。じゃないと……」

「~~~~~！！！！！！」

明久が次にやったのは、空いていたもう片方の手をあごに持つてきて、喉の辺りをくすぐり、合わせて猫のようなあやし方であるが、力がどんどん抜けていく！！ヤメテ！！周囲がこっち見てるから！！

「………なんじゃこりゃ」

それは私が言いたいわあ！！！！！！

声にならない叫びの代わりに、小鈴の首からリンツと鈴の音が響いた。

三話目（後書き）

……ははは。暴走です。

男娘感を出したかったんですか……。おまけに【店】が気分、さらにとだけに……。

感想、訂正、アドバイスをいただけたら嬉しいです。

四話目（前書き）

更新しました。

…なんか謎が増えてしまった。

皆さんが楽しんでいただけたら幸いです。

四話目

「~~~~~／／／」

「すいません。今は恥ずかしくて何もしたくないです。」

「明久のせいで、思いつきり恥をかかされて、絶賛、隅で顔を隠すので手一杯です。」

「あゝ、コホン。ともかく、俺達にはこれだけの勝てる要素と、俺の頭には勝つための作戦が来ている。…勝てないと思うか？」

「ウオオオオッ~~~~！！！！」

「俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。…皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「当然だ！！」

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

「おおーっ！！」

「俺達に必要なのはちゃぶ台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

「うおおーっ！！」

「お、おー……」

「クラスのハイテンションに圧されて、小さく姫路も拳を作っていた。」

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「そんな堂々とした言葉を言う雄二。横目で明久を見れば、その言葉を信じようか考え込んでいるようだ。」

しかし、ユウが誰かと言えば呼吸するのと同等に嘘と騙しができる外道である。つまり、使者が死者に逝くようなものだ。

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」

「…わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

…また、騙されてる。

「ああ、頼んだぞ」

クラスから歓声と拍手をされながら明久はDクラスへと向かった。ヤレヤレ。いい加減、学習すればいいのに。

まあ、最初は学習と前回の羞恥（／＼）の仕返しに見逃すけど……

「という訳で、アイツはバカだから危険になったらアイツを盾に逃げるように。さて、次にだギーギャベー!!」

『さ、坂本!!?』

『敵襲だ! 狙撃されたぞ!!』

『見ろ! 坂本の両目が…五円玉になってる!!』

『一体、誰が……』

「アレ? そういえば鈴は?」

「んむつ? いないぞ?」

「さっきまでそこにいましたよね?」

「……鈴なら明久を追ってた」

……ユウ、死んどけ。

ユウを狙撃した後、廊下に出て、新校舎側にあるDクラスへ向かうため渡り廊下に向かう。流石にホームルームも終わり始めたので何人か生徒と擦れ違った。

「……あ、スズ! ちよつと、スズ!」

もう少しで渡り廊下に足を踏み入れるところで後ろから声がかけられた。

「…ヒロミ?」

「おはよう! 元気だった?」

声をかけてきたのは少し日焼けになった健康的な肌。ヘアバンドをつけた少女、中林宏美。テニス部の中心的存在であり、【店】を担

う店員の一人をやってもらっている。

「ハイ。いつもの依頼、部活とかのもまとめてあるから」

「エッ？」

「…あれ、品表を回収しに来たんじゃないの？そういえば、あんたはクラスどこ？私はEだったけど代表よ？やっぱC？意外にBとか？」

あ、旧校舎にいたのはE、Fの品表を回収しに来たと勘違いされているのか。とようやく納得がいった。

「…いや、オレはFだった」

「……ハアッ！？アンタがF！？」

「そつ。悪いがそれでちよつと用があるからまた後でー」

「イイイイイヤヤヤヤアアア……！！！」

さつさと新校舎に行きたかったので、強引に話を断ち切って再び渡り廊下に足を踏み入れようとしたが、向こうから叫び声。…しかも、知っている声の叫びが聞こえてきた。

目を凝らして見てみれば誰かがこちらへ走ってくる。その背後には7、8人程の男女が追いかけてきていた。

「アレ？あれってアンタがいつも言ってた吉井じゃ……って、スズ？目が据わってるわよ？」

目が据わってる？そりやそうだ。こっちに走ってきている明久の制服がちぎれていたり、刃物に切られたようになってたり、全身がボロボロにされているのだから……。

「スズ？背中に手を入れて…何、その手の平サイズの筒？（カシャガチャカシャン）えっ、伸びた！？武器！？槍よね、それ！？」

惜しい。前回も出したけど槍じゃなくて戦斧。今の相棒《虎咆》。小さく、折りたたみ可能な代わりに、軽くて破壊力は低いけど…。

『待ちやがれ、Fクラスのくずが！！』

『面倒ごとを持ってきやがって！！』

『ボコされて果てるーオオオオオオッ！！？』

「ハアッハアッ……リン？」

渡り廊下から旧校舎側。つまり、後一步で旧校舎であり、虎咆を持つオレの間合いに入らないギリギリ。

そこで戦斧の切っ先を鼻先につけられる事でようやくDクラスの面々が立ち止まった。……後一步だったのに。

「どうも、Dクラスの皆さん。悪いことは言わないからそこから一步でも旧校舎の境界を越えないことをお勧めしとく」、
半ば、そこが我慢の限界ラインだから

「な、なんだよお前！俺らはそのFクラスのカス代表に用があるんだ！！」

「そうだ！下位勢力の分際で、身の程を教えてやるんで、邪魔するな！」

「ソイツをボコボコにしないと気がすまないんだよ！！」

「邪魔するならあなたも容赦しないわよ！？」

カス代表。分際。身の程。ボコボコ。容赦しない？…本当に後一步踏み込んでくれないかな……。

「あゝ、そのDクラスの人達。今すぐ引いたほうが良いわよ？」

「ああん？誰だ？」

「あれ、中林さん？」

「…あんたら、これが誰か知っててケンカ売ってる？」

「誰って……なんか、青筋うかんでいないか、アイツ？」

「…浮かんでるな、白髪の中にばっちりと……白髪？」

「なあ、あれってまさか……」

「そつ。玄関先でよく起こる人山を作るく白光の黒子よ？」

あゝ、また妙なネームが付けられているんだ。どうでもいいけど。

「改めまして。カスのFクラス、黒子こと黒井小鈴と言います。ちなみに趣味で卓球便も経営中ですが……」

「なっ！？Fクラス！！？」

「おまけに卓球便って何でも屋の！？」

ああ、それだけで店の事をわかってもらえるようになったのは嬉しいけど……。

「しばらくDクラスは休業させてもらいますか」

『『『『ナニイイ！！！！』』』』

うるさいな。やろうと思えば骨の2桁ぐらいは逝けるのにそっちの方が好みかな？

「リン。ストップ」

虎咆に力を入れようかと思った瞬間に息がようやく整った明久がそう言ってきた。

「僕なら大丈夫だから。ホラ、ね？戻ろう？」

「……ハアっ、わかったよ」

さっきまで頭の中が真っ黒になっていたのが一気に冷めて落ち着いてしまった。

「それじゃ、今日の午後から開戦、ということだ」

「……ついでにそっちのタマちゃんにしばらく販売は休みて伝言、よろしく」

立ち尽くしている面々は無視し、明久と共にFクラスに戻ることにした。

「雄二！！何が騙すような真似はしないだ！！このゴリラ野郎ー」

「雄二？パンダ目になってもキモいだけだよ？」

「気色悪いゴリラとメガネザルの合成獣にしか見えないな」

Fクラスに戻ってきて最初に見たのは仁王立ちでこちらを睨んでいる坂本代表だった。……目が青タンでパンダになっていたが。

「……言いたいことはそれだけか！！テメエのおかげだろうが！！！！」

そう言っただけでオレに指指しをしてきたが……ああそういえば、

「五円玉二枚、返して」

「言うことはそれだけか！！……勘弁ならねえ。女とはもう思わねえ！！」

そう言つて拳を鳴らしながらこちらに向かつてくる。目玉をぶつ飛ばされなかっただけいいと思えよ。

「黒髪さんに頼まれてたく雄二くん、人形。等身大の発注でもしよつかない」

「よし、今からミーティングを行うぞ」

分かれればいい。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

いつの間にか姫路とミナが明久を心配していたが、これといったケガはないはずだ。

「鈴、主も大丈夫だったか？」

「ん？ああ、虎咆を出して脅したら止まってくれたからな。…イヤ、一人二人戦闘不能にした方がよかったか？」

「よくない」

「……過激過ぎ」

そこまで過激かな？正当防衛ぐらいになると思うが。……そういえば、

「忘れてた。ハイ、ムッチー。契約違反のカメラの半分」

「……！！」

すっかり忘れてた。カバンに入れていた、朝回収したカメラの半分を手渡した。

ムッチーはカメラを手渡されると膝から崩れ落ちていった。

「去年も言つたよね？女子更衣室等を見ることが可能なセットをされたカメラ、ローアングルを撮る目的と思われる位置のカメラは回収して、半分戴くつて。あつ！ムッチー以外のもあつたからそれ対策は頼むな」

「……（コクッ）」

「ああつ！もうダメ！死にそう！」

ムッチーに依頼をしていたら、また明久が暴走してる。大方、ミナ

が照れ隠しに『なら、殴つても大丈夫ね』とか言つたんだろう。

「明久、落ち着け。それと、ユウにミーティングは行けないって伝えといて」

「えっ、なんで？」

「ミセの方で用事があるから。それじゃよろしく」

「あ、うん」

明久にそう言つて教室を出ていく。

しかし、用はミセと言っても卓球便ではない。

手元に視線を移し、携帯の画面を見る。

「『旧校舎の2階の空き教室で影をよく見かける』か。噂の真実が見間違いか大人しい（・・・）といいけど……無理だろうな」

なにせ、此処には召喚獣システム（・・・）があるのだから。

師匠に任されたのに思わず溜息が出る。

しかし、誰かが小鈴の顔を見る事ができたなら、その唇の端が上がっているのを見ただろう……。

四話目（後書き）

ようやく次回から戦争に入れそうです。

中々話のテンポが一定しません……。

訂正、アドバイス、感想をいただけたら嬉しいです。

五話目（前書き）

更新です。

なんか明久がレベルアップ？ディープダウン？をさせてしまいました
たが…… まあいいでしょう。
楽しんでいただけたら幸いです。

五話目

《バカテスト、国語》

【第二問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあつた上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』
- 『(2) 見つかり没収(涙)』

教師のコメント

シユールな光景ですね。しかし、(2)はどういうことでしょうか。

黒井小鈴の答え

- 『(1) 河童のタケルが足つって溺れて流される』
- 『(2) 泣いてるモモを蜂が刺す』

教師のコメント

場面は合っていますが、ことわざを書いてください。そして、タケルとモモって誰ですか。

吉井明久の答え

『（１）リンの勘定計算ミス』

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

黒井さんも人間ですので失敗はします。そして、君は鬼ですか。

「それでは、回復試験を始めます。準備はよろしいですか？」

「はい」

今オレは姫路と共に高橋先生担当の下、回復試験を受けている。なぜなら、振り分け試験を途中退席した者は、途中受けた教科すら全て零点にされる。……時間返せって言いたいよ。

つまり、今のオレらは召喚した瞬間に戦死となってしまう、西さんによる【戦死者、補習フルコースツアー】に強制連行されてしまう。経験者曰く、『……あれは補習じゃなく、洗脳だ。教育じゃなく、調教……アアアアアアアッ！！ヤメテくれ！！オレ、ハニンゲンダ、トラニハナレナイ！！オレはトラじゃないんだ！！！！』と暴れ出したとか。……ナニコレ。西さん、何をやってんのさ。かなり怖いんですけど。

「黒井さん。試験に集中してください」

「失礼」

今は負けた事を考える時じゃなかったな。目の前の問題をさっさと解かないと。一問の正解が召喚獣のHPやら攻撃力やら……どちらかと言えばレベルに近い物になるんだし。

しかし、そう考えると振り分け試験が終わってすぐのこの試召戦争は、全体的に得点が上なDクラスが勝つに違いないって数字上は思っただろうな。

けど、これは学力だけの勝負じゃなく、学力を利用した戦争だから、十分勝つ手段に策略はある。

……明久なら気づくだろう。

<DクラスVS Fクラス、前線>

「む。総員、戦死する前に退くのじゃ！防衛に集中するのじゃ！」

『塚本！Fクラスの前線、撤退していくぞ！』

『そりゃそーだ。Fクラスのバカどもに俺らが負ける訳がねえ！』

『おらあ！！Fクラス一人撃破！！』

新校舎側の渡り廊下、入口で戦争の前線が行われていた。しかし、点数の差が戦線に見え始めていた。

「さあ来い！この負け犬が！」

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷり指導してやるからな」

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう」

『お、鬼だ！誰か、助けっ――イヤアア――（ボタン、ガチャ）』

まるで死臭を嗅ぎ付けたハゲ鷲のごとくに鉄人が表れ、戦死になった男子生徒を片手で持ち上げ、補習室へと連行した。

『お、おっかねえ……』

『だが見る。Fクラスの奴ら怖じけづいたみたいに引いてくぜ？』

確かにFクラスの面々はほとんど退いていき、後ろの方は旧校舎側に着きそうだった。……まるで誘い込むように。

『さあ、Fクラスをさっさと潰すぞ!』

『!待て!一人で突っ込み過ぎだ!』

先程Fクラスの一人を補習室送りにした生徒がさらに、と退いていくFクラスを追っていった。

『塚本?何焦ってんだ。相手は格下だよ?多少先行しても簡単にやられや……』

『ぎゃあああああ!!!!!!』

『!!!!!!』

「戦死者は補習!」

再び現れた鉄人が戦死者…先程、独断先行をした生徒を担ぎ出していた。

『なっ!?山本!!』

『一体、何があつたんだ!!?』

『見る!!!Fクラスが何かやってるぞ!!!』

旧校舎の入口近くを見てみれば人数が増えていた。恐らく、増援と合流したのだろう。

しかし、それだけでは戦死させられた理由がわからない。

『『『『『試^{サモン}獣召喚つ!!!』』』』』

するとFクラスがまだこちらに距離があるのに召喚獣をだしてきた。
「第二陣、放てえ!!」

Fクラスからの号令が渡り廊下に響き、それと共に、召喚獣達が自分の武器をこちらの召喚獣目掛けて投げてきた。

『なっ!?!全員避ける!!!』

それぞれ飛来物を避けようとした。しかし…、

『うわっ!崎本、邪魔だ!!!』

『こっちも当たるだろうが!!!』

『キャッ!!!』

互いの召喚がぶつかったり、壁に邪魔されたりと上手くかわすこと

ができない。

それもそうだろう。まだ、召喚獣の扱いに慣れていない上に、渡り廊下という狭い空間で混雑しているのだから。

しかし、投げられた武器は大工用ハンマーやバット、鉄パイプにのこぎりなどだったが、やはり点差があるのか戦死まではいかなかった。

「第三陣、ようい！」

『奴ら召喚獣を引っ込めたぞ』

『また来るぞ！』

『ーなら、先に攻撃するだけだ！』

そう言えば数人がFクラスに突撃していった。

「島田さん！！須川くん！！」

「OK。島田美波、受けます！！サモン！！」

「同じく、須川亮参加します！サモン！！」

『Fクラス 島田美波 数学 173点 VS Dクラス 渡

辺有志 113点』

『！！Bクラス並だと！？』

「数学は得意教科なの」

『だが二、三人がかりでいけば……』

『させつかよ！！』

『Fクラス 須川亮 83点』

『Fクラス、近藤吉宗も行きます！！』

『武藤啓太も参戦します！！』

『同じく、君島博もです！！』

『Fクラス 近藤吉宗 51点

Fクラス 武藤啓太 63点

Fクラス 君島博 70点

「武藤くんは島田さんの援護！バットで敵の手と武器の根元だけを狙って！須川くん達は三人がかりで！！武器や体勢を崩させるのを重点に！！」

『『『『了解！！』』』』

点数だけを見ればDクラスが勝つだろうが…。だが、戦争は点数^しだけでなく、人数^{かず}も重要なのだ。

攻撃をしようにも体勢を崩され、そこを袋叩きにされたり、武器を狙われ、攻撃自体が出来ないで戦死するものもいた。

「皆離れて！第三陣、放てえ！！」

その間に再召喚をした面々の投擲が始められた。Fクラスはすぐに回避行動に出れたが、体勢を崩されているDクラスの召喚獣は無理だった。

Dクラス 野村誠 0点

Dクラス 佐々木正治 0点

Dクラス 樋口 宗太 7点

「戦死者は補習う！！」

『ギヤアア！！』』

「た、助けてくれ、塚本！！戦死しちゃう！！」

『塚本！！』

『くそお！全員、次が来る前に突撃…』

『ウワアア！階段からもFクラスが来たぞ！！』

『Fクラス 鈴木翔 数学 52点

Fクラス 瀬戸雄大 数学 49点』

『塚本！挟まれたぞ！？』

『どうする!!?』

『クツ…。全員、撤退だ!! 体勢を立て直す!! 身を守ることだけを考え後ろへ進め!!』

『樋口は!?!』

『無理だ、あきらめろ!!』

『クソッ!! 樋口、すまない!』

個人的な点差はあるため、身を引くのは可能だった。だが、試験召喚戦争ルールによって戦闘を挑まれたのは敵前逃亡のため幾人かは逃げなかった。

『見ろ! Dクラスが引いてった』

『どうする、吉井?』

『深追いは危ないよ。相手は格上だし、時間稼ぎはできるから戦力の再確認かな?』

『吉井隊長。こちらの戦死は三名。補給が必要な重症者は木下隊長も含み六名。対し、あちらは戦死、八名。重症者、五名とのことです』

『了解。んじゃ秀吉、回復試験を受けてきて?』

『うむ。…しかし、主の策が当たったの。どうしたのじゃ?』

『ほんと、上相手にここまでの確に……。あんた、頭打った?』

『少しは褒めてくれないの!?! ゲームの応用だよ。相手は嘗めてたから深追いしてきたのを利用しただけだよ……』

『「ゲーム?」』

『うん。確か、WBCって名前のネットゲームだったかな。それにあつたのを利用したの』

そう答えたらほぼ全員がこちらを見ていた。

『…どうしたの?』

『吉井: WBCって《ワイド・バグ・サイバース》か?』

『あ、それそれ』

ワイド・バグ・サイバース
WBC。ネットゲームでいわゆる《終わらない》ゲーム。レベルがなく、鍛えれば鍛えるほど強いキャラにすることができる。しかし、

パワーだけを鍛えても途中で上がりにくくなり、身体の耐久度を上げると再び上がるなどバランスにも気をつけないといけない。といったように育成もできる。RPGを楽しむもよし、ユーザーやノンプレイヤーの仲間を集めるのもよし。そして、偶然できたバグが作り上げたとも言われるほど多彩な利用法があるゲームとして有名である。

「へえー吉井もやってんのか？」

「俺、この間レイカを仲間にできたぜ！」

「でも次の日に離れていったんだろ？」

「俺はギラザウルスを倒したぜ？」

「ステータスアップのために金魚のふんしたんだっけ？」

「んで、吉井のユーザー名は何なんだ？」

「文明ふみあきだったかな？」

「『何イツ！！！？』」

明久の台詞には一同が反応した。

「ど、どうしたのさ？」

「お前がああ《文明》なのか！？」

「No.1バグキャラ、孫59と【ロングロングファイト】で唯一勝った、伝説持ちの！？」

ロングロングファイトとはあらかじめ決まった戦力で何処まで闘い続けられるか。何処まで領地を広げられるかという国物語を行う物である。

ちなみに勝ったというのは、何故かノンプレイヤーキャラクターの仲間（女の子）が無駄な戦闘はしっかり避けて、戦う時は無双の働きをしてくれて……気がついたら世界征服して、天下大平を達成してたりする。半ば明久はそれについていっただけなのだ：

「すげえっ！！そんな奴がいればDクラスなんて屁でもねえ！！」

「吉井隊長！あんたに命預けるぜ！！」

「ウオオオオオ！！燃えてきたあ！！」

上がりまくったテンションは下げるべきではないだろう、うん。

「皆、今は奇襲が上手くいっただけ。次は相手も本気で力を入れてくる。本番はこれからだよ」

「オウツ！！！」

「僕らの役目は時間稼ぎ。そのために前線を維持し続ける…誰が犠牲になっても、できるだけ長く、だ」

「……………」

「勝つために姫路さんが来るまで耐え抜く！男の意地を見せれるか！？」

「………つたり前だ！！」

「倒す事は二の次でいい！敵を此処で足踏みさせるのが僕らだ！！男の華道、咲かせてみせる！！」

「オオオオオ！！！！」

「Dクラス！攻めてきました！！」

「全員戦闘準備！必ず勝つぞ！！」

「ツシャアアア！！サモン！！！！」

そして再び戦線がぶつかり合う！

「…吉井？私は女なんだけど？」

「いや、あれは場の流れっただけで、別に島田さんが男勝りということでは……島田さん、関節はそっちには曲がらな……！？」

「誰が男顔負けですって！！！！？」

「そこまで言っただけ！！！！！！！！！！」

「…なんか明久が墓穴を掘った気がするな。…少し早く行こう。勝負と遊びは全力で、ってね……。」

チリンッ

五話目（後書き）

明久のゲーマー率が深まりました。そして、ゲームでも墮として
いるのか！？

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900z/>

バカとリンと召喚獣

2011年12月19日13時48分発行